

大学間交流を活発化するための探索的研究

— 学生に対するヒアリング調査から —

渡部 昌平¹・菅原 良²

人間関係形成に課題や不安を感じる学生は多く、教職員も不安視している（例えば堀井（2002）は大学生の「集団に溶け込めない不安」について述べている）。岡田（1995）は青年の対人関係の特徴として、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけたり傷つくことを非常に恐れる、形だけの円滑な関係を求める傾向があると指摘している。また、学校への不適応感などを訴える学生の増加が指摘されており、松島と塩見（2002）はその原因の一つとして対人関係が影響していると述べているなど、学生の対人関係不安への対応は大学としても対応の必要が迫られている。

人間関係に不安を感じ「形だけの円滑な関係」を求める学生がいる一方で、大学間交流など衝突を恐れず積極的に外部と接触しようとする学生もいる。この差はいったいどこから生じてくるのか。また大学間交流に参加することで、学生の対人関係不安はどう変化していくのだろうか。

大学間交流に関する研究を検索すると、NiDBR で2件、KAKEN で43件、CiNii で86件がヒットするが、その全てが海外大学との交流についての研究である。実は国内大学同士の交流については、実践はあるものの研究がほとんど行われていないのが現状である。今の学生について「大人しい」「消極的」という指摘はあるが、その「大人しい」「消極的」を解消しうる大学間交流についての研究はない。

そこで本研究では、学生へのヒアリングからまず「なぜ大学間交流をしないのか」の理由を探り、将来に向けて学生同士の大学間交流を増

やすための方策について、探索的に検討することを目的とする。

方法

A大学B学部においてヒアリングに協力してくれる学生を募り、2013年9月に3名のヒアリングを行った。ヒアリングは半構造面接によって行い、「なぜ大学間交流をしないのか」を中心にヒアリングすることとした。

結果

大学間交流に参加している学生C（1年生女子）

※他学生が大学間交流をしない理由についてヒアリング

- そもそも「大学間交流」があること自体を知らないのではないか。
- 大学間交流という単語を知ったとして、まず「何をやるの？」と聞かれる。具体的内容が分からない。想像しにくい。
- それに加えて、楽しさが伝わらない。自分は先輩から「大学間交流は、いろんな人と出会えるから楽しい」と言われたが、「いろんな人と出会える」ことが楽しい気持ちとつながらない人も多いのではないか。もっとメリットが伝わらないと拡がらないのではないか。
- それに加えて、実際には集まって準備したりなどの時間的なコストや手間暇も大変。「やりがいがある」と思えば良いが、負担感は大きい。

¹総合科学教育研究センター

²秋田大学 教育推進総合センター

- ・有名・人気サークルでなくとも30人を超える学生がいるサークルがある。これはそのサークルに「楽しそう」「入りやすそう（敷居が低そう、難しくなさそう）」というイメージがついているからではないかと思う。部長の人脈・人徳もある。

大学間交流に参加していない学生D(2年生男子)

大学間交流も楽しそうだが、自分も含めて多くの学生は自大学ですら交流は友達とサークルぐらいで、いつも一緒にいるメンバーは限られている。人にもよるが、自大学の生徒以外と交流するサークルがあっても、なかなか入りたいたとは思わない。

大学間交流に参加していない学生E(4年生男子)

大学間交流サークルには入らない。理由は

- ・自分から積極的に他人（見知らぬ人）に関わるのはあまり好きでない
- ・友達とワイワイ遊ぶのは好きだが、新たに関わりを持つのは勇気がいる
そういったサークルに入るかどうかではなく、「なぜ他大学の学生と交流しないのか」について回答するならば
- ・誘われれば行くけど自分からはちょっと
- ・今の友達とそれなりに楽しく過ごせているから充分
- ・そもそもそんなことを考えたことがない、めんどくさい

考 察

学生DやEの発言で分かるとおり、「面倒くさい」「周囲の友人で十分」「今の環境でもそれなりに楽しい」と考えている学生が多いことは想像に難くない。他方で将来の社会人生活を考えると、「他人（見知らぬ人）と新たに関わりを持つ」練習を、学生時代からしておく必要があると考えている。

また学生Cの指摘のように「そもそも大学間交流を知らない」「大学間交流の具体的なイメージ、実施内容が分からない」「大学間交流のメリットが分からない」「負担感がある」「楽しそう、入りやすそうと思われる必要がある」とい

う点は考慮に入れる必要がある。

さらに学生Eの「誘われれば行く」という発言は参考になり得る。学生Cも人気サークルの秘訣として「部長の人脈・人徳」と発言しているが、巻き込み型のサークルとなることで参加人数を増やし、活発に活動できる可能性がある。

結 論

大学間交流を増やそうとすれば、まず学生に大学間交流の存在を伝えた上で、その楽しさ・メリットを伝える必要がある。1つには「将来、社会人になった際には、他人（見知らぬ人）と新たに関わりを持つ経験・能力を持つ人間が有利だ」という伝え方もあるかもしれない。また大学間交流サークルにおいては、「友人を誘う」ことも重要な事業（練習）となるかもしれない。

大学間交流につき、本研究では現段階での探索的研究として学生3人へのヒアリングを行った限定的成果に留まる。今後は、本研究を踏まえて質問紙を作成し、複数大学での質問紙調査を行うことで、より具体的に学生の大学間交流に対する態度・状況を把握することを想定している。また大学間交流に参加している学生から「参加する楽しさ・メリット」をヒアリングし、聴取した「参加する楽しさ・メリット」を非参加学生に聞かせることでどういった変化が生じるかを調査することが考えられる。

国内大学同士の大学間交流に関する研究が少ない中、更なる大学間交流を進めるためには更なる調査・研究が欠かせない。

参考文献

- 堀井俊章 (2002). 「成人期における対人不安意識の発達の变化 (続報)」『山形大学紀要 (教育科学)』13 (1), 79-94.
- 松島るみ, 塩見邦雄 (2002). 「対人的自己効力感と学校における対人ストレスの関係について」『日本教育心理学会総会発表論文集』44, 241.
- 岡田 努 (2002). 「現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察」『性格心理学研究』10, 69-84.